はじめに

この「中国人物伝」(全四巻)は、中国史の流れのなかで、政治や文化などさまざまな分野で活躍した人々にスポットをあてたものである。このうち、第Ⅰ巻では、紀元前八世紀前半にはじまる春秋戦国時代から秦、漢(前漢・後漢)まで、およそ千年にわたる時間帯に登場した人々、第Ⅱ巻では、二世紀後半にはじまる三国志の時代から南北朝時代まで、ほぼ四百年にわたる時間帯に登場した人々、第Ⅲ巻では、六世紀末にはじまる隋から、唐、宋(北宋・南宋)を経て、十四世紀後半の元末まで、八百年になんなんとする時間帯に登場した人々、第Ⅳ巻では十四世紀後半にはじまる明、清から二十世紀の近現代まで、およそ七百年にわたる時間帯に登場した人々を、それぞれとりあげた。こうして古代から近現代に至るほぼ三千年の時の流れのなかで、それぞれのおかれた時代状況と火花を散らしながら、めいっぱい生き輝いた人々の固有の軌跡をたどることによって、長い中国の歴史を「今、ここに」、いささかなりともいきいきと蘇らせ、浮かびあがらせることができれば、これにまさる喜びはない。

こうした「中国人物伝」第Ⅰ巻にあたる本書は、「乱世の生きざま——春秋戦国時代」と「統一王朝の光と影——秦・漢」の二部構成をとる。

神話・伝説の時代はさておき、現在のところ、中国において現存が確認される最古の王朝は殷(前一七〇〇頃—前一一〇〇頃)だが、殷は、暴君の代名詞とされる最後の天子紂のときに、周の武王に滅ぼされた。

武王の立てた周王朝（西周は前一一〇〇頃―前七七一、東周は前七七〇―前二五六）は紀元前七七一年、いったん滅亡するが、紀元前七七〇年、その命脈を継いだ東周が成立する。しかし、東周の政権基盤は弱く、各地に依拠する諸侯が自立し覇権を争う春秋（前七七〇―前四〇三）・戦国（前四〇三―前二二一）の乱世となる。

本書はこの春秋戦国の乱世をもって開幕する。第一部「乱世の生きざま――春秋戦国時代」では、まず春秋時代にあいついで覇権をにぎった「春秋五覇」、すなわち斉の桓公、晋の文公、楚の荘王、宋の襄公、秦の穆公の五人の軌跡をたどり、ついで南の大国呉と越のせめぎあいの渦中で、壮絶な死を遂げた伍子胥を「復讐の鬼として」の項で、つづく「伝説の美女」の項において、越出身の美女西施をとりあげた。

政治的には激動の時代であった春秋戦国の乱世は反面、中国思想の黄金時代にほかならなかった。そこで、まず「放浪する知の巨人」の項において、春秋時代の後半に出現した儒家思想の祖孔子をとりあげ、その言行録『論語』に即しつつ、孔子の稀有の生涯と思想のありかたを探った。ついで「隠者列伝」の項において、儒家の対極に位置する道家思想の祖、老子と荘子を中心とする隠者の系譜をたどり、さらに「諸子百家の時代」の項において、孟子、荀子、韓非子など、戦国時代に輩出した多種多様の思想家の生きかたと考えかたの特色を見た。

時代が春秋から戦国に入ると、ますます乱世状況が過熱するが、やがて「戦国七雄」と呼ばれる韓、魏、趙、斉、燕、楚、秦の七国に収斂される。戦国末期になると、このうち秦が強大となり、他の六国の脅威の的となる。こうした国際情勢のもと、各国を股にかけて弁舌をふるった蘇秦や張儀をはじめとする遊説家の軌跡を、「戦国のエトスの体現者」の項において追跡した。また、「恐るべきテロリストたち」の項において、滅びゆく六国の最後の抵抗を象徴する刺客荊軻をクライマックスとする、春秋戦国の刺客五人の鮮烈な姿を、『史記』刺客列伝にそいつつ描出した。さらに、この第一部の末尾には、王者にまさる力を

もち、やはり国境を越えて活躍した「戦国四君」、斉の孟嘗君、趙の平原君、魏の信陵君、楚の春申君の動きを追った「国境を越えた貴人」の項を配し、波瀾万丈の大乱世、春秋戦国時代に生きた人物群像の結びとした。

春秋戦国の大乱世に終止符を打ったのは、剛腕の大政治家、秦の始皇帝である。本書第二部「統一王朝の光と影――秦・漢」は、空前の大帝国秦を立てたこの始皇帝を皮切りとし、「狂気の不滅願望」の項において、想像を絶するそのスケールの大きさと飽くことなき不滅願望にスポットをあて、合わせて「冷血の丞相の運命」の項において、始皇帝の懐刀だった丞相李斯のかりそめの栄光から悲惨な末路への経緯を見た。

紀元前二一〇年、皇帝となってから十二年目に始皇帝が死去した後、秦王朝はたちまち内部崩壊しはじめ、これとともに各地で反乱が勃発、またたくまに中国全土に騒乱状態が広がった。この戦乱のただなかから、やがて項羽と劉邦(漢の高祖)という二人の英雄が浮かびあがり、壮絶な漢楚の戦いの果てに、劉邦が項羽に打ち勝ち、紀元前二〇二年、漢王朝(前漢は前二〇二―後八、後漢は二五―二二〇)を立て、全土を統一するに至る。「遊侠無頼のリーダー」の項では、もと遊侠の劉邦が秦末、社会にみなぎっていた反逆のエネルギーを結集し組織化して、ライバルに打ち勝ち皇帝にのしあがる顚末をたどった。劉邦を祖とする漢王朝は、彼の妻呂后を嚆矢として、女性が大いなる影響力をもった王朝であり、下層から高みに急上昇した者も少なくない。「女たちの漢王朝」の項では、こうした女性たちが時代を活性化し、やがては禍を及ぼすに至るまでの過程を追跡し、女性たちの側から漢王朝の興亡を照射した。また、「遊侠列伝」の項では、もと遊侠の劉邦が立てた王朝らしく、漢代の前半には、個人的道義にあふれた毅然たる遊侠が存在

し、社会を裏側から支えた様相を、『史記』遊侠列伝を素材としながらたどってみた。

漢王朝は第七代皇帝の武帝（前一四一―前八七在位）の時代に絶頂期を迎える。武帝は内政面では、儒家思想を軸とする政治体制をととのえて人材を登用し、外政面では、それまで懐柔策をとりつづけてきた北方異民族匈奴と戦ってこれを弱体化させることに成功した。この匈奴との戦いにおいて、大活躍したのは歌手出身の衛皇后の弟衛青、甥の霍去病である。文武両面の人材を積極的に登用して版図を広げ、漢王朝を絶頂期に導いた武帝も晩年、公私両面にわたって衰えがめだつようになり、これとともに漢王朝そのものも下降へと向かいはじめる。「絶頂期の専制者」の項目では、この武帝の繁栄から没落への軌跡をたどった。

輝ける武帝の時代には、政治や軍事にすぐれた人材のみならず、ユニークな学者、傑出した文人や歴史家もまた次々に出現した。そのうち、「博識を誇った「滑稽」」の項において、武帝の宮廷で道化に身をやつした東方朔、「恋に生きた宮廷文人」の項において、武帝に愛された漢代きっての文学者司馬相如、「怨念の大歴史家」の項において、司馬相如と対照的に、武帝の逆鱗に触れて宮刑に処せられ、発憤して『史記』を著した大歴史家の司馬遷をとりあげ、それぞれの生の軌跡をたどった。

武帝の晩年から下降へと向かいはじめた漢王朝は、第十一代皇帝の元帝（前四九―前三三在位）、第十二代目の皇帝成帝（前三三―前七在位）の時代になると、衰える一方となった。かくして元帝の皇后の王氏（元后。成帝即位後は元太后）の一族が勢力をつよめ、やがてそのうちの一人、王莽（元太后の甥）が主導権をにぎり、手を替え品を替えて術数を弄したあげく、西暦八年、漢王朝を亡ぼして新王朝（八―二三）を立てた。しかし、王莽は時代錯誤の復古主義者であったため、行政機構はたちまち大混乱におちいり、社会不安も激化して、赤眉の乱や緑林の乱など民衆反乱が勃発、これと連動して漢王朝の一族である豪族も反旗をひるが

えすに至る。かくて、この激動の渦中で、王莽は殺されてしまう。「頭でっかちの偽善者」の項では、この王莽をとりあげ、その奇怪な軌跡を追跡しつつ、漢王朝の終幕を描いた。

王莽の滅亡後、主導権をとったのは反旗をひるがえした豪族勢力だった。やがてこの豪族勢力のなかから、南陽の劉氏一族の劉秀が前面に立ち現れて、残存する種々の反乱勢力を抑えこみ、これを吸収して後漢王朝を立て即位(光武帝。二五―五七在位)、新しい時代を切り開いてゆく。光武帝は名君であり、柔道(穏やかなやりかた)を統治の基本方針としたため、前漢末の混乱や戦乱で疲弊した社会はゆるやかに回復してゆく。「「柔道」をもって治める」の項では、この光武帝の軌跡をたどった。なお、第二部の末尾に付した「「虎穴」に入ったつわもの」は、対外的に消極策をとりつづけた後漢において、例外的に西域に勇名をとどろかした班超の姿を寸描したものである。

春秋戦国から後漢までほぼ千年の時の流れのなかで、古代中国は揺れつづけながら、その様相を大きく変えていった。変わりつづける時代のなかで、あるいは主役としてあるいは脇役として、ここでとりあげた人々は何を求め、いかに生き死んだか。本書が、はるかな歴史のかなたから、立ちあがってくる彼らの姿を可能なかぎり、ありありと映しだすことができればと、願うばかりである。

目次

はじめに

第一部　乱世の生きざま——春秋戦国時代

春秋五覇　諸侯同盟のリーダーたち　3
復讐の鬼として　伍子胥　14
伝説の美女　西施　34
放浪する知の巨人　孔子とその弟子　46
隠者列伝　許由・伯夷・叔斉・老子・荘子　69
諸子百家の時代　墨子・孟子・荀子・韓非子　79
戦国のエトスの体現者　呉起・商鞅・蘇秦・張儀　89
恐るべきテロリストたち　曹沫・専諸・豫讓・聶政・荆軻　105
国境を越えた貴人　戦国四君　120

第二部　統一王朝の光と影——秦・漢

狂気の不滅願望　始皇帝　137
冷血の丞相の運命　李斯　150
遊侠無頼のリーダー　漢の高祖　155
女たちの漢王朝　呂后から趙飛燕まで　178
遊侠列伝　朱家・郭解　195
絶頂期の専制者　漢の武帝　203
博識を誇った「滑稽」　東方朔　213
恋に生きた宮廷文人　司馬相如　222
怨念の大歴史家　司馬遷　227
頭でっかちの偽善者　王莽　242
「柔道」をもって治める　光武帝　262
「虎穴」に入ったつわもの　班超　273

初出一覧　5
略年表　1

装丁＝杉松　欅

第一部

乱世の生きざま——春秋戦国時代

春秋五覇　諸侯同盟のリーダーたち

紀元前十二世紀、殷王朝を滅ぼして成立した周（西周）王朝はいったん滅びるが、紀元前七七〇年、平王が洛邑に遷都したのを境に、東周王朝（前七七〇―前二五六）となる。しかし、東周の政権基盤は弱く、各地に依拠する諸侯が自立してみるみる勢いを増し、入り乱れて覇権を争う春秋時代（前七七〇―前四〇三）へと突入する。

三百数十年にわたった春秋の乱世において、東周王朝を保護する建前をとりながら、諸侯を集めて会盟（諸侯が会合して盟約を結ぶこと）を開き、諸侯同盟のリーダーすなわち「覇者」となった人物が五人いる。いわゆる春秋五覇である。春秋五覇の数えかたには諸説あり、斉の桓公（前六八五―前六四三在位）、晋の文公（前六三六―前六二八在位）、楚の荘王（前六一三―前五九一在位）、宋の襄公（前六五〇―前六三七在位）、秦の穆公（繆公ともいう。前六五九―前六二一在位）の五人とする説、あるいは襄公・穆公のかわりに、呉王夫差（前四九五―前四七三在位）と越王句践（前四九七―前四六五在位）を入れる説などがある。

「管鮑」に支えられて――斉の桓公

春秋五覇の筆頭に数えられる斉の桓公は、はげしい後継者争いのあげく、斉の支配者になった人物であ

る。ちなみに、斉は周王朝創設の元勲、太公望呂尚を始祖とする国であり、首都は臨淄（山東省淄博市北東）に置かれていた。

桓公は本名を小白といい、斉の第十四代の君主、襄公（前六九七―前六八六在位）の弟にあたる。襄公は魯の君主に嫁いだ実妹と深い関係をつづける一方、臣下をないがしろにして約束違反するなど、公私ともに乱れた性格異常者だった。そんな兄襄公の危害を被ることを恐れ、上の弟の糾と下の弟の小白はそれぞれ斉を脱出し、糾は魯に、小白は斉に近い莒という小国に逃げこむ。糾と小白は異母兄弟であり、糾のほうは母が魯の公女だったため、母の祖国に逃げたのである。この糾を輔佐したのが管仲（？―前六四五）と召忽、小白を輔佐したのが鮑叔（生没年不詳）だった。

糾と小白が逃亡した後、斉に内乱が起こる。かくて紀元前六八六年、襄公の従兄弟の公孫無知がクーデタを起こして襄公を殺害、みずから君主となった。しかし、まもなく公孫無知は殺され、糾と小白にチャンスがめぐってくる。先手を打ったのは莒にいた小白のほうだった。いちはやく帰国し即位した小白は、糾を支援する魯の軍勢を撃破し、けっきょく糾は、小白すなわち斉の桓公の報復を恐れた魯軍によって殺害されるに至る。このとき、糾の二人の輔佐役のうち、召忽は自決するが、管仲は桓公に降伏する。管仲はかつて桓公を射殺そうとしたことがあり、桓公はこれを根にもって管仲を殺そうとした。しかし、輔佐役の鮑叔が、天下の覇者となるためには、なんとしても有能な管仲の存在が必要だとつよく推薦し、桓公もこれを受け入れる。こうして斉の政治・軍事の責任者となった管仲は、桓公を覇者におしあげる最大の功労者となった。

実は、鮑叔と管仲は若いころから親友であった。鮑叔は貧乏だった管仲の立場を理解し、二人で商売をしたとき、管仲が分け前を多く取っても責めようとしなかったという話もある。管仲は昔の友情を忘れな

い鮑叔のおかげで命拾いをしたばかりか、斉政権の最高首脳となる幸運をつかむことができたのだ。

後年、管仲は鮑叔との長い交友をふりかえり、「私を生んでくれたのは父母だが、私を真に理解してくれたのは鮑くんだ」(『史記』管晏列伝)と述べ、深い感謝をあらわしている。この管仲・鮑叔のたがいに信頼しあった友人関係を指して「管鮑の交わり」といい、以後、生涯を通じて変わらぬ友人関係の代名詞となる。ちなみに、唐代の大詩人杜甫(七一二―七七〇)は七言古詩「貧交行」の冒頭四句において、管鮑の交わりをとりあげ、こう歌っている。

翻手作雲覆手雨　手を翻せば雲と作り　手を覆せば雨
紛紛軽薄何須数　紛紛たる軽薄　何ぞ数うるを須いん
君不見管鮑貧時交　君見ずや　管鮑　貧時の交わり
此道今人棄如土　此の道　今人　棄てて土の如し

(手を上に向ければ雲となり、手を下に向ければ雨となる〔そのように昨今の人情はあっというまに変わってしまう〕。そんな軽薄な輩は腐るほどいて、いちいち数えたてるまでもない。見よ、あの管仲・鮑叔の貧乏時代の交友を。このすばらしい友情の道を今の人間は土くれのように見棄てて顧みようともしないのだ)

管仲・鮑叔のようなすばらしい関係は、人情紙のごとき今の世では求めるべくもないという、杜甫のため息が聞こえてくるような作品である。

有能な管仲の輔佐を得たおかげで、斉の国は富み栄え、桓公は九回にわたって諸侯を集めて会盟を開き、

春秋最初の覇者の栄誉を担うことができた。孔子は『論語』憲問第十四において、次のように管仲を称賛している。

……子曰く、管仲、桓公に相として、諸侯に覇たらしめ、天下を一匡す。民は今に到りて其の賜を受く。管仲、微かりせば、吾れ其れ髪を被り衽を左にせん。（以下略）

（先生〔孔子〕は言われた。管仲は桓公の宰相となり、桓公を諸侯の覇者とし、天下を一つの正しい基準に帰一させた。人々は今に至るまでそうした管仲の恩恵を被っている。もし管仲がいなかったならば、われわれは〔異民族の支配を受け、その風俗を押しつけられて〕髪をふりみだし、左前に着物を着ていたことであろう）

孔子は管仲より約百年後に生まれた人である。その孔子がこれほど管仲を称賛しているのだから、いかに管仲が偉大であったか知れようというものだ。

桓公の輔佐役をつとめること四十一年で、管仲はこの世を去る。管仲を失った後、桓公は急速に衰え、後継の座をめぐるお家騒動の渦中で死去する。管仲の死からわずか二年後のことである。これ以後、斉は内乱で揺れ動き、覇者としての力を失うに至る。

奇跡の覇者——晋の文公

斉の桓公につづいて諸侯同盟のリーダー、覇者になったのは晋の文公（前六三六—前六二八在位）、本名重耳である。伝説では、晋の始祖は周の成王の弟叔虞であり、叔虞が唐（山西省翼城県付近）に封じられ、息子

の燮のときに晋と称するようになったとされる。晋は東周初期、本家と分家のはげしい主導権争いのあげく、分家が優位にたち、重耳の祖父武公(前六七八―前六七七在位)の時代に、本家を攻め滅ぼした。さらに、重耳の父献公(武公の息子。前六七六―前六五一在位)は残存する一族の有力勢力を根こそぎ粛清し、周辺の小国や異民族を次々に滅ぼすなどして猛威をふるい、晋はいっきょに西方の大国として頭角をあらわした。

見てのとおり、献公はすこぶるエネルギッシュな人物だが、これが裏目に出て、女性問題でお家騒動をおこす羽目になる。西方異民族の驪戎を攻撃したさい、献公は驪姫という美女とその妹を連れ帰り、側室にした。献公は姉の驪姫を溺愛し、やがて彼女の産んだ息子奚斉を太子に立てようとする。実は、献公には申生・重耳・夷吾という三人の優秀な息子があり、年長の申生がすでに太子に立てられていた。しかし、けっきょく驪姫の巧みな誘導が功を奏し、献公の勘気にふれて申生は自殺し、重耳は異民族出身だった母の国の狄に、夷吾は梁に、それぞれ亡命した。

献公の死後、内乱が起こると、夷吾は隣国秦の支援を受けて帰国、即位する。これが恵公(前六五〇―前六三七在位)である。恵公は即位してから六年後の紀元前六四四年、兄の重耳を恐れて狄に刺客を送り暗殺をはかった。この情報を得た重耳は狄を離れ、斉の桓公のもとに身を寄せる決心をする。

重耳は晋を脱出し狄に亡命したとき、四十三歳だった。以来、狄に身を寄せること十二年、恵公の圧迫をかわすべく、狄を離れたときにはすでに五十四歳になっていた。お家騒動に巻きこまれた重耳はひたすら身をかわし、逃げつづけたわけだが、そんな彼の唯一の救いは、趙衰・咎犯をはじめとする有能な臣下グループが、艱難辛苦をともにしてくれたことだった。

重耳主従が斉に到着した二年目に、桓公が死去し、斉の国内は混乱するが、重耳は依然として斉に滞在しつづけた。斉に身を寄せること五年、斉の公女と結婚した重耳はもともと権力欲が希薄な人柄だったこ

ともあって、すっかり安楽な生活に馴れ、晋への帰国の意志を失ってしまう。業を煮やした臣下グループはむりやり重耳を斉から連れだし、最終的には晋への帰国をめざす諸国行脚に出発した。このとき、重耳の妻たる斉の公女は臣下グループに協力し、重耳を叱咤激励して出発させた。

斉を離れた重耳主従は曹・宋・鄭の国を経て、当時、めきめきと力を強めていた南の大国楚に到着する。このとき、楚の成王（前六七一―前六二六在位）は重耳を手厚く遇し、こうたずねた。「帰国されたら、何をもって私に報いてくださるかな」。すると、重耳は「やむをえず、君王と平野や湿地で戦いを交えることになった場合、（開戦の前に）わが方の軍勢を三舎（九十里。春秋時代の一里は四〇五メートル）退却させます」と答えた。成王はこの答えに満足し、重耳主従を数か月にわたって滞在させたのだった。

重耳主従が楚に滞在していた間に、状況が急変する。晋の恵公すなわち重耳の弟夷吾が病気になったため、人質として秦にいた恵公の息子の子圉が秦を脱出し、晋に帰国したのだ。秦の君主穆公は不快感をつのらせ、対抗措置として楚に滞在中の重耳を秦に招聘し、娘と結婚させるなど、手厚く遇した。紀元前六三七年、恵公が死去し、子圉（懐公）が即位するや、秦の穆公は晋に向けて軍隊を出動させ、重耳を帰国させる。この結果、重耳は十九年におよぶ亡命に終止符を打ち、晋に帰国して即位、懐公を殺して晋を支配下に収めた。こうして逃亡者重耳は晋の文公に変身したのである。ときに紀元前六三六年、重耳六十二歳。

晋の文公は名君であった。彼は晋の行政・経済・軍事の制度をととのえて、国家基盤を固め、内乱に揺れる東周王朝を輔佐するなど業績を積み、しだいに諸侯の間で頭角をあらわす。そんな文公を覇者におしあげる契機になったのは、楚との戦いである。紀元前六三三年、楚は北へ向かって軍勢を進め、宋の首都を包囲した。この翌年、宋の救援要請を受けた文公は出兵し、秦・斉・宋の軍勢と協力して、城濮（河南省濮陽県）で楚軍と対決する。開戦に先だち、文公は自軍を大幅に後退させた。いうまでもなく、不遇時代、

楚の成王とかわした「三舎」の約束を守ったのである。けっきょく、晋・秦・斉・宋の中原（黄河流域）連合軍は楚軍を撃破し、楚の北進を阻止することに成功した。

「城濮の戦い」に勝利した後、文公は践土（河南省鄭州市北）の地に王宮を造り、東周の襄王を迎えて、斉・魯・宋・鄭・衛など諸国の君主を集め、斉の桓公についで、春秋時代第二の覇者となる。覇者として中原の諸国をまとめること五年、紀元前六二八年に晋の文公は死去した。ときに七十歳。十九年にわたる亡命生活を経て、六十歳をこえた身で君主の座につき、ついに大覇者となった晋の文公こそ、まさに奇跡の人というべきであろう。

衰えきった東周王朝をしのぐ実力を有しながら、あくまで天子を輔佐し天下の安定につとめる姿勢を崩さなかった斉の桓公と晋の文公は、「斉桓・晋文」と呼ばれ、以後、長らく人々の称賛・憧憬の対象となった。たとえば、『三国志』の英雄の一人、魏の曹操は、自分には後漢王朝にとってかわる意志がないことをアピールするさい、「斉桓・晋文が現在まで名声を残しているのは、その強大な軍事力をもって、なおよく東周王朝に仕えたからである」（「自明本志令」）と、斉桓・晋文を引き合いに出している。

「鳴かず飛ばず」――楚の荘王

斉桓・晋文についで春秋第三の覇者となったのは、楚の荘王（前六一三―前五九一在位）である。長江中流域に依拠した楚はもともと南方系の異民族の国であり、西周時代、楚の君主のなかには「我れは蛮夷（野蛮人）なり。中国の号諡に与らず」と述べて、周王朝の王だけが「王」を名のる慣例に従わず、王と自称した者もいた。異民族の自覚とプライドを保持しつづけた楚は以後、中原の高度な文化を吸収して、しだいに強大となり、東周が弱体化した春秋時代には、中原の諸国を脅かす大勢力となる。

かくして、紀元前七〇六年、楚の君主熊通は先祖の例にならい、みずから武王（前七四〇―前六九〇在位）と称して、自立の姿勢を顕示した。亡命中の重耳を礼遇し、その後、「城濮の戦い」で敗北した楚の成王はこの武王の孫である。

成王は後継の座をめぐるお家騒動に巻きこまれて、息子の商臣すなわち即位後の穆王（前六二五―前六一四在位）の軍勢に居城を包囲され、自殺するに至る。死の直前、成王は今生の名残に珍味の熊の掌を食べたいと懇願するが、穆王はにべもなく拒否したという話が伝わっている。この非情な穆王は軍事的才能にはすぐれ、北へ向けて軍勢をくりだして小国を攻め滅ぼし、黄河南岸まで勢力を広めた。

穆王が在位十二年で病死した後、息子の侶が即位する。これが楚の荘王である。即位したものの、荘王は三年の間、酒と美女にうつつを抜かし、まったく政務を顧みようとしなかった。業を煮やした臣下が、「ある鳥が岡にいますが、三年、飛ばず鳴かずでした。これはいったい何という鳥でしょうか」と謎をかけると、荘王はこう答えた。「三年飛ばないが、飛べば天に至るだろう。三年鳴かないが、鳴けば人を驚かせるだろう」。時機を待っているのだと、豪語したわけだ。これを典拠として、なりをひそめ、いっこうにパッとしないさまを、「鳴かず飛ばず」と表現するようになる。

この言葉どおり、やがて荘王は素行をあらため、内政の充実につとめたうえで、祖父や父の宿願を受けついで北進を開始し、紀元前六〇六年、東周の首都洛邑郊外にまで軍勢を進める。事としだいによっては、東周を攻め滅ぼすことも厭わないと威嚇したわけだ。これに対し、東周の定王は配下の王孫満を派遣して、楚の荘王をねぎらわせた。すると、荘王は王孫満に向かって、天子の象徴として周に伝わる九つの鼎の大小軽重をたずねた。九鼎を楚にもってかえるぞ、という恫喝にほかならない。しかし、王孫満は毅然として、「周の徳は衰えたといっても、天命はまだ改まっていません。鼎の軽重はまだ問うべきではありませ